

令和２年度 広島市教員等育成に関する協議会議事要旨

1 開催日時

令和３年３月２２日（月） １０：００～１１：３０

2 開催場所

広島市役所本庁舎 ２階 講堂

3 出席者

(1) 大学関係者・学校関係者・教育委員会

石原 義文	(広島文教大学 教職センター長)
卜部 匡司	(広島市立大学 国際学部 教授)
大里 弘美	(比治山大学 言語文化学科 国際コミュニケーションコース 准教授)
神野 正喜	(広島女学院大学 人間生活学部 児童教育学科 教授)
高西 実	(広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科 准教授)
立上 良典	(広島工業大学 教職課程センター長)
田中 宏幸	(安田女子大学 文学部 日本文学科 教授 教職センター長)
胤森 裕暢	(広島経済大学 教養教育部 教授)
土屋 英男	(広島国際学院大学 工学部 教授)
鶴田 一郎	(広島国際大学 教職教室 准教授)
西森 章子	(広島修道大学 人文学部 教育学科 准教授)
福原 之織	(エリザベト音楽大学 教養・教職主事 音楽文化学科 教授)
佛圓 弘修	(広島都市学園大学 子ども教育学部 子ども教育学科 ひろしま人間教育研究センター長 教授)
松浦 武人	(広島大学大学院 人間社会科学研究科 教授 教職開発専攻長)
向居 暁	(県立広島大学 地域創生学部 地域創生学科 地域文化コース 教授)
野上 朋子	(広島市立幼稚園長会 代表 (長束幼稚園長))
島本 靖	(広島市小学校長会 代表 (段原小学校長))
新川 恵美	(広島市公立中学校長会 代表 (中広中学校長))
田中 伸二	(広島市立高等学校長会 代表 (美鈴が丘高等学校長))
中尾 秀行	(広島市立広島特別支援学校長)
荒瀬 尚美【座長】	(教育委員会事務局 教育次長)
横山 元信	(教育委員会事務局 総務部長)
森川 伸江	(教育委員会事務局 学校教育部長)
野間 泰臣	(教育委員会事務局 学校教育部 指導担当部長)
松浦 宰雄	(教育センター 所長)

(2) 事務局

教育企画課長、教育企画課情報化推進・学校支援担当課長、教職員課長、指導第一課長、指導第二課長、特別支援教育課長、教育センター次長

4 意見聴取及び協議（公開）

(1) 教員の資質能力の向上について

ア 「指標の重点化」について（報告）

イ ICTを活用した指導力について

(2) 教員の養成に係る大学・学校・教育委員会の連携について

ア 教員を目指す学生の意欲を高めるための取組について

(3) その他

5 傍聴人の人数

０名

6 資料

- (1) 資料 1 平成 31 年度重点化した指標 5 項目に関する取組の成果及び今年度の進捗状況（報告）
- (2) 資料 2 G I G A スクール構想の実現に向け今後求められる教員の資質能力について
- (3) 資料 3 令和 3 年度 教育センターにおける I C T の活用に係る研修
- (4) 資料 4 令和 2 年度「大学生による学校支援活動」の活動状況及び「学校学習指導員」の任用状況について
- (5) 資料 5 令和 2 年度ひろしま未来教師セミナー実施状況について
- (6) 資料 6 教員を目指す学生の意欲を高めるための取組（教育センター）
- (7) 資料 7 大学からの質問について

7 議事内容（要旨のみ）

出席者の主な発言は以下のとおり。

【○：構成員（大学関係者・学校関係者） ●：構成員（教育委員会・事務局職員）】

(1) 「指標の重点化」について（報告）

資料 1 に基づき、事務局から説明

- 初任者研修で実施した自己評価について、いわゆる臨採を経験した者と新卒者とで結果は違っているか。臨採経験者は学校教育現場で教育力が鍛えられているという側面があると考えている。一方で大学は新卒者の養成に関わっているため、臨採経験者と開きのある項目があれば、その項目について、学内関係者に周知し、同時に底上げを目指すべきと考える。

● そうした分析は現在実施していない。貴重な視点であり、今後、把握していきたい。

- 自己評価について、4 件法を採用しているが、具体的な選択肢の表記を教えてほしい。また、4 件法の場合、評価が 2 と 3 に固まることは想像できるが、効果測定の手法として適切なのか。取組評価として、研修によって数値が向上したとあるが、この測定手法でそれを読み取ることにはできるのか。

● 自己評価の選択肢について、4 が「概ねできている」、3 が「どちらかというとできている」、2 が「どちらかというとできていない」、1 が「ほとんどできていない」と設定している。取組評価について、この数値を参考に、こういった部分に苦手意識があるのかといったことを分析し、資質能力を高める取組を効果的に進めていくために活用している。

(2) I C T を活用した指導力について

資料 2 及び資料 3 に基づき、事務局から説明し、併せて大学から事前に質問があった項目（資料 7）について回答

● I C T を活用した指導力の養成について、各大学で実践している取組があれば御紹介いただきたい。

- 電子黒板も含め、タブレット等の I C T 機器を導入し、それを活用させるような模擬授業等に取り組みながら、4 月以降に教育実習を行う学生を送り出す準備を進めている。

○ 数年前に、他県で教育実習を行う学生が、実習校から電子黒板を使用できるようになっておくように指示を受けたことを踏まえ、電子黒板とタブレットの整備を行った。また、別の学生の事例で、教育実習において、ネット上の分かりやすい映像コンテンツを授業で使いたい場合に、実習校では認められなかったというケースもあった。来年度は、自分たちでそうしたコンテンツ作りにも取り組むこととしており、今後は、使用できる機材やコンテンツについて、あらかじめ教えてもらうよう、実習校との連絡を工夫していきたい。

(3) 教員を目指す学生の意欲を高めるための取組について

資料4、資料5及び資料6に基づき事務局から説明

- ひろしま未来教師セミナーについて、昨年度、教育センターで開催された際に、研修の様子を見学させていただき、学生へのセミナー参加の声掛けの際にも自分自身の実感を持った思いを伝えることで、セミナーへの参加者も増え、非常にありがたい機会となった。今年度は、オンラインでの開催となり、今後もそれを継続したいとのことなので、可能であれば、大学の教員も視聴できるようにしていただきたい。
また、教育センターと教育委員会のホームページについて、大学の授業に関する内容や教員採用に関する内容が豊富に盛り込まれており大変参考になる。授業においても、ホームページを頻繁に開くよう学生に声掛けするとともに、課題の解決にホームページを活用させるなどの取組を行っている。
- オンラインで実施する未来教師セミナーについて、今年度は、急遽オンラインでの実施となり広報が不十分だったが、誰でも登録できるようになっている。今後は大学関係者の皆様にも案内することで、一人でも多くの方に参加していただけるように取り組んでいきたい。
- 教育センターのホームページの充実については、昨年度から、教員を目指す学生の皆さんに、多くの広島県の学校情報を届けたいという思いで進めている。昨年度のアクセス数は900程度だったが、今年度は現時点で約3,000に達している。
また、来年度は、教員を目指す学生の皆さんに、教育センターでの教員の学びを見ていただきたいと考えている。大学でも教育課程の編成等、準備をされていると思うので、できるだけ早く情報提供させていただく。
- 採用試験に合格した学生が、卒業前の1月～2月の数日間、市内の学校で教員として過ごせる、インターンシップ制度のようなものを作っていただきたい。また、広島県での採用となった学生も、広島市の採用前研修を受けることができるようにしていただくことはできないか。
- 大学生による学校支援活動は、学年や開始時期などは問わず、柔軟に受け入れを行っており、活動内容についても学校長と相談しながら進めていることから、インターンシップのような形で活動していただくことも可能である。この制度を十分に活用していただきたい。
- 制度を利用するには、大学での手続きも色々あるため、間に合わないということもある。もう少し柔軟な対応ができないか、今後、相談させていただきたい。
- 学生のためにも、必要な手続きを踏んでいるが、検討させていただく。
- 広島県での採用になった者の広島市での採用前研修については、個別の対応となることから、要望があれば相談していただきたい。
- 複数の都道府県の採用試験に合格した学生に、広島で教師になることを選んでもらえるように、未来教師セミナー等の研修において、広島で教師になることの魅力を更に強調して発信していただきたい。
- 志願倍率が低下している中、いかに志願者を増やしていくか、また、合格した方々に広島で教師になっていただくかということは喫緊の課題と考えている。来年度の未来教師セミナーの内容にどのような形で組み込むことができるかということを検討しながら、取り組んでいきたい。

- 一般社団法人教育ネットワーク中国が、今年２月に「これからの教師像２０２０」というキャリア形成支援事業をオンラインで実施したが、その際には、教育委員会事務局や市立学校の先生方に御協力いただいた。引き続き、連携していきたい。